

## 0.1 R5 数学必修

[1] (1)  $I(x) = x^{-1} \int_0^x (y+1)^2 dy = x^{-1} \left[ \frac{1}{3}(y+1)^3 \right]_0^x = \frac{1}{3}x^2 + x + 1, I(x) = x^{-1} \int_0^x y + 1 dy = x^{-1} \left[ \frac{1}{2}y^2 + y \right]_0^x = \frac{1}{2}x + 1, I(1) = x^{-1} \int_0^x 1 dy = 1$  である.

(2) 表現行列は  $A = \begin{pmatrix} 1/3 & 0 & 0 \\ 1 & 1/2 & 0 \\ 1 & 1 & 1 \end{pmatrix}$  である.

(3)  $A$  の固有値は  $1/3, 1/2, 1$  である.  $\begin{pmatrix} 0 & 0 & 0 \\ 1 & 1/6 & 0 \\ 1 & 1 & 2/3 \end{pmatrix} \rightarrow \begin{pmatrix} 1 & 0 & -2/15 \\ 0 & 1 & 4/5 \\ 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$  より, 固有値  $1/3$  に対応する固

有ベクトルは  $\begin{pmatrix} 2/15 \\ -4/5 \\ 1 \end{pmatrix}$  である. よって  $f = c(\frac{2}{15}x^2 - \frac{4}{5}x + 1)$  ( $c \in \mathbb{R}$ ) に対して  $I(f) = \frac{1}{3}f$  である.

$\begin{pmatrix} -1/6 & 0 & 0 \\ 1 & 0 & 0 \\ 1 & 1 & 1/2 \end{pmatrix} \rightarrow \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 1/2 \\ 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$  より, 固有値  $1/2$  に対応する固有ベクトルは  $\begin{pmatrix} 0 \\ -1/2 \\ 1 \end{pmatrix}$  である. よっ

て  $f = c(-\frac{1}{2}x + 1)$  ( $c \in \mathbb{R}$ ) に対して  $I(f) = \frac{1}{2}f$  である.

$\begin{pmatrix} -2/3 & 0 & 0 \\ 1 & -1/2 & 0 \\ 1 & 1 & 0 \end{pmatrix} \rightarrow \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$  より, 固有値  $1/3$  に対応する固有ベクトルは  $\begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$  である. よって

$f = c$  ( $c \in \mathbb{R}$ ) に対して  $I(f) = f$  である.

(4)  $P = \begin{pmatrix} 2/15 & 0 & 0 \\ -4/5 & -1/2 & 0 \\ 1 & 1 & 1 \end{pmatrix}$  とする.  $P^{-1} = \begin{pmatrix} 15/2 & 0 & 0 \\ -12 & -2 & 0 \\ 9/2 & 2 & 1 \end{pmatrix}$  である.  $P^{-1}AP = \begin{pmatrix} 1/3 & 0 & 0 \\ 0 & 1/2 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{pmatrix}$

である. よって  $A^n = P(P^{-1}AP)^nP^{-1} = P \begin{pmatrix} 1/3^n & 0 & 0 \\ 0 & 1/2^n & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{pmatrix} P^{-1} = \begin{pmatrix} \frac{2}{15 \cdot 3^n} & 0 & 0 \\ -\frac{4}{5 \cdot 3^n} & -\frac{1}{2 \cdot 2^n} & 0 \\ \frac{1}{3^n} & \frac{1}{2^n} & 1 \end{pmatrix} P^{-1} =$

$\begin{pmatrix} \frac{1}{3^n} & 0 & 0 \\ \frac{6}{2^n} - \frac{6}{3^n} & \frac{1}{2^n} & 0 \\ \frac{15}{2 \cdot 3^n} - \frac{12}{2^n} + \frac{9}{2} & -\frac{2}{2^n} + 2 & 1 \end{pmatrix}$  である.  $A^n \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \frac{1}{3^n} \\ \frac{7}{2^n} - \frac{6}{3^n} \\ \frac{15}{2 \cdot 3^n} - \frac{14}{2^n} + \frac{15}{2} \end{pmatrix}$  である. すなわち  $I^n(x^2 + x + 1) = \frac{1}{3^n}x^2 + (\frac{7}{2^n} - \frac{6}{3^n})x + (\frac{15}{2 \cdot 3^n} - \frac{14}{2^n} + \frac{15}{2})$  である.

[2] (1)  $f(e) = f(e \cdot e) = f(e) \cdot f(e)$  より,  $e = f(e)^{-1}f(e) = f(e)^{-1}f(e)f(e) = f(e)$  である.  $e = f(e) = f(yy^{-1}) = f(y)f(y^{-1})$  である. よって  $f(y^{-1}) = f(y)^{-1}$  である.

(2)  $(x, f(x)), (y, f(y)) \in G_f$  に対して  $(x, f(x)) \cdot (y, f(y)) = (xy, f(x)f(y)) = (xy, f(xy)) \in G_f$  より演算で閉じている.  $(x, f(x)) \cdot (x^{-1}, f(x^{-1})) = (xx^{-1}, f(x)f(x^{-1})) = (e, f(e)) \in G_f$  より逆元を持つ. よって部分群をなす.

(3)  $F: G \rightarrow G_f; x \mapsto (x, f(x))$  とする.  $F$  は同型写像.

(4)  $G$  がアーベル群なら  $G \times G$  はアーベル群である. よって部分群  $G_f$  は正規部分群である.

$f$  が全射準同型であるとする.  $G_f$  が正規部分群であるから,  $x, y \in G$  に対して  $(y, e) \cdot (x, f(x)) \cdot (y, e)^{-1} \in G_f$  である. すなわち  $(yxy^{-1}, f(x)) \in G_f$  である. よって  $f(yxy^{-1}) = f(x)$  より  $yx(xy)^{-1} \in \ker f$  である. したがって  $x \ker f \cdot y \ker f = y \ker f \cdot x \ker f$  より  $G/\ker f$  はアーベル群. よって群準同型定理から  $G$  はアーベル群.

[3] (1)  $f_x = (y - x^2y)e^{-\frac{1}{2}(x^2+y^2)}$ ,  $f_y = (x - y^2x)e^{-\frac{1}{2}(x^2+y^2)}$  である. ともに 0 となる点  $(x, y)$  は  $(0, 0)$  と  $(\pm 1, \pm 1)$  である.  $f_{xx} = (x^3y - 3xy)e^{-\frac{1}{2}(x^2+y^2)}$ ,  $f_{yy} = (y^3x - 3yx)e^{-\frac{1}{2}(x^2+y^2)}$ ,  $f_{xy} = (x^2y^2 - y^2 - x^2 + 1)e^{-\frac{1}{2}(x^2+y^2)}$  である.  $(0, 0)$  では  $x = 0$  として  $y$  軸方向の増減を考えれば極値点でない.  $(\pm 1, \pm 1)$  (複号同順) ではヘッシアンは  $\begin{pmatrix} -2/e & 0 \\ 0 & -2/e \end{pmatrix}$  である. これは負定値行列であるから極大値  $f(1, 1) = 1/e$  をとる.

$(\pm 1, \mp 1)$  (複号同順) ではヘッシアンは  $\begin{pmatrix} 2/e & 0 \\ 0 & 2/e \end{pmatrix}$  である. これは正定値行列であるから極小値  $f(-1, 1) = -1/e$  をとる.

(2)  $A = \{x \mid |x| \geq 1\}$  と  $B = \{x \mid |x| \leq 2\}$  のそれぞれで一様連続なら  $\mathbb{R}$  上一様連続である.  $B$  は有界閉区間であるから  $f$  の連続性より一様連続である.  $A$  上で考える. ある  $\delta > 0$  と任意の  $x \in A, y \in (x - \delta, x + \delta)$  に対して  $|f(x) - f(y)| = \left| \frac{y^2 - x^2}{(1+x^2)(1+y^2)} \right| \leq \frac{|y-x||x+y|}{x^2} \leq \delta \left| \frac{2}{x} + \frac{\delta}{x^2} \right| \leq \delta(2 + \delta)$  である. したがって任意の  $\varepsilon > 0$  に対して  $\delta^2 + 2\delta < \varepsilon$  となる  $\delta > 0$  をとれば,  $\forall x, y \in A, |x - y| < \delta \Rightarrow |f(x) - f(y)| < \varepsilon$  であるから  $A$  上一様連続である.

(3)  $(1-x) + (x-y) = s, (1-x) - (x-y) = t$  と変数変換すると,  $y = 1-s, x = (1+y-t)/2 = 1-(s+t)/2$  である. よってヤコビアンは  $\begin{vmatrix} -1/2 & -1/2 \\ 0 & -1 \end{vmatrix} = 1/2$  である. 積分領域は  $0 \leq 1-s \leq 1-(s+t)/2 \leq 1$  より  $0 \leq s \leq 1, -s \leq t \leq s$  である. よって

$$\begin{aligned} \iint_D \frac{\text{Arctan} y}{\sqrt{(1-x)(x-y)}} dx dy &= \int_0^1 \int_{-s}^s \frac{\text{Arctan}(1-s)}{\sqrt{s^2-t^2}} dt ds = \int_0^1 \text{Arctan}(1-s) \left[ \text{Arcsin} \frac{t}{s} \right]_{-s}^s ds \\ &= \pi \int_0^1 \text{Arctan}(1-s) ds = \pi \int_0^1 \text{Arctan} s ds = \pi \left( 1 \cdot \frac{\pi}{4} - \int_0^{\pi/4} \tan x dx \right) \\ &= \pi \left( \frac{\pi}{4} + [\log |\cos x|]_0^{\pi/4} \right) = \pi \left( \frac{\pi}{4} - \log \sqrt{2} \right) \end{aligned}$$

である.

[4] (1)(a)  $Y$  の開集合全体を  $\mathcal{O}_Y$  とし,  $X$  の開集合全体を  $\mathcal{O}_X$  とする.  $f: X \rightarrow Y$  が連続写像であるとは,  $\forall V \in \mathcal{O}_Y, f^{-1}(V) \in \mathcal{O}_X$  であることである.

(b)  $W \in \mathcal{O}_Z$  に対して  $(g \circ f)^{-1}(W) = f^{-1}(g^{-1}(W))$  である.  $g$  は連続であるから  $g^{-1}(W) \in \mathcal{O}_Y$  である.  $f$  は連続であるから  $f^{-1}(g^{-1}(W)) \in \mathcal{O}_X$  である. よって  $g \circ f$  は連続である.

(2)(a) 位相空間  $(X, \mathcal{O}_X)$  がハウスドルフ空間であるとは,  $\forall x, y \in X, x \neq y$  に対して開集合  $U, V \in \mathcal{O}_X$  が存在して  $x \in U, y \in V, U \cap V = \emptyset$  であることである.

(b) 任意の  $y \in X \setminus \{x\}$  に対して,  $U_y, V_y \in \mathcal{O}_X$  で  $x \in U_y, y \in V_y, U_y \cap V_y = \emptyset$  となる開集合が存在する.

$\bigcup_{y \in X \setminus \{x\}} V_y = X \setminus \{x\}$  は開集合であるから,  $\{x\}$  は閉集合.

(3)(a)  $A$  がコンパクトであるとは,  $A$  の任意の開被覆が有限部分被覆をもつことである.

(b)  $A \cup B$  の開被覆  $S = \{U_\lambda \mid \lambda \in \Lambda\}$  を任意にとる.  $S$  は  $A$  の開被覆でもあるから有限部分集合  $\Lambda_A \subset \Lambda$  が存在して  $A \subset \bigcup_{\lambda \in \Lambda_A} U_\lambda$  である. 同様に  $B$  の開被覆でもあるから有限部分集合  $\Lambda_B \subset \Lambda$  が存在して  $B \subset \bigcup_{\lambda \in \Lambda_B} U_\lambda$  である. よって  $A \cup B \subset \bigcup_{\lambda \in \Lambda_A \cup \Lambda_B} U_\lambda$  である.